

修士論文（要旨）
2011年1月

日本語教育における学習リソースとしての視聴覚メディア
—インタビューからみえた学習者と教師の視点のずれ—

指導 齋藤伸子 先生

言語教育研究科
日本語教育専攻
209J3011
谷口美穂

目次

第1章 序論	
1.1 研究背景	1
1.2 用語の定義	1
1.2.1 本研究における「視聴覚メディア」	1
1.2.2 学習リソース	2
1.3 先行研究	2
1.3.1 日本の視聴覚メディアが学習者に与える影響	2
1.3.2 視聴覚メディアの長所と短所	3
1.3.3 視聴覚メディアを利用した日本語教育の実践報告	5
1.3.4 学習者と教師に関わる要因	5
1.4 稿者の授業実践の結果と分析	7
1.5 研究目的と研究の意義	8
第2章 調査概要	
2.1 調査期間と調査対象	9
2.2 調査方法	10
2.3 分析方法	10
第3章 学習者に対する調査の分析	
3.1 教室外における視聴覚メディア使用の実態	13
3.1.1 来日前の視聴覚メディア使用	13
3.1.2 来日後の視聴覚メディア使用	14
3.2 教室内における視聴覚メディアに対する考え方	18
第4章 教師に対する調査の分析	
4.1 視聴覚メディアを使用した授業の実態	25
4.2 視聴覚メディアを使用した授業に対する意識	32
第5章 考察1 学習者と教師の視点のずれの観点から	
5.1 目的のずれ	38
5.2 効果に対する認識のずれ	41
5.3 教師の描く「学習者像」と学習者のずれ	42
第6章 考察2 学習者と教師の視点のずれが生じる要因	
6.1 学習者のニーズと教師の目的の観点から	49
6.2 学習の評価の観点から	50
6.3 自律学習の観点から	52
第7章 まとめと今後の課題	
7.1 視聴覚メディアを学習リソースとして活用するために	56
7.2 今後の課題	56
謝辞	
参考文献	

要 旨

近年、日本の漫画、アニメ、映画、ドラマなどが広く海外に普及し、これらが日本語学習者の学習の動機につながっているというケースも少なくない。同時に、日本語教育現場においても、ドラマや映画をはじめとする映像素材が学習リソースとして注目され、その利用が広がっている。また、視聴覚メディアを日本語教育の中に取り入れた実践も近年多く行われており、その中では、視聴覚メディアを学習リソースとして使用することの意義や利点が多く論じられている（保坂・Gehrtz2010, 高橋 2006, 吉村・宮副 2009, 柴田 2008, 小原 2008, 梁 2008 など）。しかしながら、授業の当事者である学習者や実際に教育現場で授業に携わっている教師の声を取り上げているものは少ない。稿者の経験から、日本語教育における「メディア」に対する教師の認識は様々で、学習リソースとしての価値を疑問視する声もある。稿者が勤務する日本語学校では、「メディアクラス」と呼ばれる、ドラマや映画、アニメなどの映像素材を用いた授業が行われているが、学習者には人気の高いクラスである一方、教師は効果的な授業の方策が見いだせず、模索を続けているという現状がある。

そこで、「視聴覚メディア」を利用して「効果的な」授業を行うためには、まず、学習者、教師それぞれが、「視聴覚メディア」をどのように捉えているのか、また双方の捉え方にずれはあるのかを明らかにすべきだと考えた。本研究では東京都内のA日本語学校において、「メディアクラス」を履修した経験のある学習者を対象に、視聴覚メディアの教室外での使用法、授業での使用法についての調査を行い、併せて、同クラスを担当した経験のある教師に授業の内容や目的、効果について調査を行った。調査は半構造化インタビューで、文字化したインタビューデータは、以下の3点に注目して質的データ分析（佐藤 2008）を行った。

- 1) 学習者は日常的にどのように視聴覚メディアを利用しているのか
- 2) 学習者は視聴覚メディアを使った授業をどのように捉えているのか
- 3) 教師は視聴覚メディアを使って何を教えようとしているのか

分析の結果、調査協力者の学習者は、おもにインターネットを通じて日常的に視聴覚メディアに接触し、各々自分なりの方策を用いて、自身の日本語能力向上に役立っていることが分かった。学習者は、映画やドラマを使用してシャドーイングのようなことを行ったり、母語による字幕の表示・非表示を切り替えたりして、「聴解力向上」、「発音」、「語彙の使用場面の確認」など目的に合わせた自律的な利用法を持っていた。そして、教師の解説による深い理解や、他の学習者との協働学習、会話や討論など、自宅での自習だけでは獲得できない効果を「メディアクラス」での授業に求めていることも明らかになった。また、学習者は実用につながる日本語の習得を重視するという傾向があった。「メディアクラス」に対しては各自、指摘する問題点はあるながらも、肯定的な意見が多く、一定の効果を認めている学習者が多かった。

それに対して、教師は、様々な目的、目標を掲げて授業に当たってはいるものの、授業で行う活動については、「内容理解」に重点を置いている傾向があることが明らかになった。また、視聴覚メディアを使用した授業では、明らかな「効果」が得られない点を問題視している声が多かった。その要因として、視聴覚メディアの性質の要因、学習環境要因、学習者の要因、評

価基準，評価法の要因などが挙げられた。

上記の1，2と3を比較し分析すると，視聴覚メディアに対する学習者の認識と教師の認識の間には，少なからずずれがあり，それが教師の「授業がうまくいかない」原因の一つになっていると考えられる。また，学習者と教師の「目的」は乖離してはいないものの，教師の「方法」と「効果の評価基準」が確立していないことも，十分な「効果」を実感できないことに影響しているといえる。本調査から，自分なりのストラテジーを駆使しながら，視聴覚メディアを日本語学習に役立てようとする学習者と，視聴覚メディアを手に，活用の方策を模索しながらも確固たる効果を実感できずにいる教師の実態が明らかになった。

日本語学校のように，どの教師がどのクラスを担当するか分からない状況にある日本語教育機関において，自由度と流動性が高いからこそ，「生かすも殺すも教師の腕次第」というのはあまりにもリスクが高い。従って，今後，このような視聴覚メディアの実用に向け，さらなる教授法の研究が急がれる。

参考文献

- 石塚美枝・守谷智美・宮副ウォン裕子（2008）「メディア・リテラシーを育てる『現代大衆文化』：参加者の多様性・多文化理解を促す日本語授業実践」『桜美林言語教育論叢』4, 15-24.
- 伊東祐郎(2008)『日本語教師のためのテスト作成マニュアル』アルク
- 大川英明（2006）「映画における文化要素と日本語教育」『関西外国語大学留学生別科日本語教育論集』（16）, 111-127.
- 小原律子（2008）「日本語教育における学習素材としての映像メディアー映画・テレビ番組の教材化」『倉敷芸術科学大学紀要』（13）, 205-214.
- 加藤清方（2003）「教育資源としてのテレビ・アニメーション番組と日本語教育（特集 日本語の輸出）」『日本語学』22(12), 56-64.
- 窪田守弘(2002)「映画による日本語教育の実際と可能性」水谷修, 李徳奉編『総合的日本語教育を求めて』国書刊行会, 248-265.
- 熊野七絵（2010）「日本語学習者とアニメ・マンガ：聞き取り調査結果から見える現状とニーズ」『広島大学留学生センター紀要』（20）, 89-103.
- 佐藤郁哉（2008）『質的データ分析法：原理・方法・実践』新曜社
- 高橋 純子(2006)「<報告>テレビドラマ聴解の授業報告」 『筑波大学留学生センター日本語教育論集』（21）, 77-96.
- 土井眞美(1997)「映像素材の教材としての利用の可能性--話しことば教育のための学習項目抽出（特集 視聴覚による話しことば教育）」『日本語学』16(9) 明治書院 42-50
- 長谷川恒雄・土井眞美・保坂敏子（2007）「授業における映像メディア（ドラマ・アニメ等）の活用」『日本語教育学会春季大会予稿集』
- 早矢仕智子（2005）「海外における日本語学習者のためのテレビドラマ教材による日本語教育ー韓国大眞大学校の授業ケースから」『宮城学院女子大学大学院人文学会誌』（6）, 1-10.
- 藤井みゆき（2008）「視聴覚メディアを用いた教室活動の有効性」『同志社大学日本語・日本文化研究』（6）, 46-58.
- 藤家智子(2002)「映像素材を用いた聴解・会話の授業について」『日本語・日本文化研究』（9）, 41-58.
- 保坂敏子・Gehertz 三隅友子（2010）「ドラマを利用した日本語・日本文化教育のための教材と授業デザインー言語と文化の統合を目指してー」『2010 年度日本語教育学会秋季大会予稿集』, 317-318.
- 保坂敏子・土井眞美（2001） 「映像素材を使用した学習活動に対する学習者から見たビリーフー教室場面の学習活動の場合ー」『小出記念日本語教育研究会論文集』（9）, 25-39.
- 吉村弓子・宮副ウォン裕子（2009）「日本と香港をつなぐヴァーチャル教室の映画批評交換 - 異文化理解における映画の効果と外国人留学生の役割」『北海道言語文化研究』7 北海道言語研究会
- 梁正善(2008)「ドラマ「ハケンの品格」を利用した日本語の授業」『長崎外大論叢』(12), 103-114.